異邦人のための救いの神学

（日本人宣教に向けて）

2016年３月２０日

西九州伝道所　佐々木正明

始めに

私たち日本人が、自由に聖書が読めるようになって、１５０年以上になります。たとえ政府が和魂洋才のスローガンで、密かにキリスト教を阻止しようとしたことがあったとしても、西欧諸国からのプレッシャーも手伝って、明治以降のキリスト教は、かなり自由に宣教活動を進めることが出来ました。

ところが、日本のキリスト教の勢いは非常に弱く、その発展は微々たるもので、諸外国の様相とはまったく異なっています。私たちの、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの交わりを例に挙げても、創立１０２年になる、今年２０１６年の日曜礼拝会への出席者総数は、世界全体で６５００万人をかなり超えると言うことです。発展途上国が多く、たとえ主催者発表のデモ参加者のような数字であったとしても、これは大変なものです。その中で、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の数は、わずか、１万人を少し超えるだけです。日本と言う国を、あまり特殊なものとして扱うことには異論がありますが、こと、キリスト教の進展と言うことでは、まさに特殊と言わざるを得ません。

今までも、キリスト教界内外の実に多くの人たちが、この問題を論じてきましたが、実際に日本の宣教に携わる一人の伝道者として、筆者が心底から納得できるような論には、まだ、お目にかかっておりません。これまでも筆者はこの問題に関していろいろなことを言って参りました。その論点の殆どは、他の人たちが取り上げていない、あるいは気づいてもおられない、いわばユニークなものだと思っております。日本の宣教を論じておられる方たちの多くは、日本人も外国人も、西欧の尺度を持って日本を測り、西欧の学問をもって日本を論じておられるために、ヤードとフィートの巻き尺をもって、日本の家屋を測っているようなことになっています。筆者はそれらのすべてが間違っているとは考えませんが、大きな誤りがあるとも感じています。

そこで今回も、たぶん、今までどなたも語ったことが無く、誰も論じたことのない視点から、お話ししたいと考えています。それは、異邦人である日本人には、異邦人の神学をもって福音を語らなければならないと言うことです。パウロが聖霊の導きによって打ち立てた信仰による救いと言う、普遍的福音の神学をさらに進めて、異邦人の立場から福音を見直し、

異邦人にわかり易くまた受け入れ易く、福音を語る努力をしなければならないからです。

戦後、キリスト教宣教は発展期とも言える30数年を経験しました。いま私の住む地方都市にあるいくつかの教会も、１９６０年代には１００人を超える礼拝会を持っていました。それが今は、軒並みに２０人、４０人の礼拝会となっています。宣教の波が引いてしまったのです。その理由は色々ありますが、もっとも大きいのは、敗戦後に見たアメリカという「キリスト教国」のすばらしさが、幻滅に終わってしまったことだと思います。

敗戦後、鬼畜米英と叫んでいた多くの日本人は、アメリカの民主主義、人道主義のすばらしさに感服したのです。そしてその、精神的土台であったキリスト教に憧れ、たくさんの人が教会を訪れたのです。

ところが、その日本人の憧れは、ベトナム戦争によって粉砕されてしまいました。あの戦争で、日本人の多くはアメリカの欺瞞と偽善を見たのです。そしてその偽善と欺瞞は、単にベトナム戦争だけではなく、その前後の様々な紛争の中にも、見て取ることが出来るようになりました。情報の発掘と伝達が格段に進み、アメリカだけではなく、西欧キリスト教諸国の欺瞞や独善性を、歴史の中にも現在の世界情勢の中にも、たくさん見つけ出すようになったのです。

あれほど美しく見えたアメリカが薄汚れて見えるようになりました。あれほどかぐわしく感じていた西欧キリスト教諸国の臭いが、鼻につくようになってきたのです。戦後の私たちは、日本は戦争犯罪者の集団であり、劣等国であるかのように教え込まれてきました。でもそれは、戦勝者が自分たちに都合良く書いた歴史であったことに、少しずつ気づいて来たのです。

今の日本にも、アメリカが大好きな人たちは大勢いますし、アメリカには、素晴らしいところがまだまだたくさんあります。あらゆる面を総合的に判断するならば、アメリカは今でも最も良い国の一つに違いありません。しかし今、アメリカに倫理的気高さを認め、憧憬をもって見上げる日本人はあまりなく、キリスト教を尊敬する人もずっと少なくなりました。かえって、キリスト教が無くてもここまでやってきた日本に満足し、自分たちにはキリスト教なんて不要だと思う人が増えて来たのです。

キリスト教にも、素晴らしいところはまだまだたくさんあります。しかしこれからも、しばらくの間は、キリスト教のイメージは悪化し続けることでしょう。自分たちの良さを売りにするパリサイ人のような、「私たちを見てください」という上から目線の伝道をしていたのでは、いよいよ行き詰まることでしょう。キリスト教は西欧先進国の宗教で、良い宗教な

のだなどと思い込んではなりません。私たちは福音を正しく理解し、その正しい福音を、キリストのように「仕える者」の心になって、伝えて行かなければならないのです。私たちが伝えるのはキリスト教ではなく、福音でなければなりません。

創造と堕落　救いの約束

神の救いの歴史は、天地創造以前から始まっています。神には、人間のような過去・現在・未来がありませんが、私たち人間が論じるときは、どうしても、時間を追って進めなければなりません。神の救いの御計画は、天地創造以前に建てられていました。その後、計画に従って、神は全人類の救いを実現しようとなさったのです。神の永遠の救いの御計画は、罪を犯した直後のアダムに対して、神がお語りになったお言葉の中に示されています。　（創世記３：１５）

神がお造りになったものは、人間を含めてすべて、非常に良いものでしたが、（創世記１：３１）人間の罪のために、すべてが変わってしまいました。神は人間に完全な自由意思を与え、自由意思を持って神に従う道を選ばせることによって、人間の創造の完成とされたようですが、人間はその自由意思を間違って用いてしまいました。そういう意味においては、人間の創造はまだ完成されていないとも言えるわけです。その人間の失敗の回復があって、創造の完結となるわけです。

罪の結果

人間の罪の結果、神がお造りになったものの美しい秩序は、乱れてしまいました。罪の結果はただ人間と人間社会だけにではなく、自然の世界にも及びました。人間の心は罪によって破壊され、捻じ曲げられてしまい、自然の世界は病と自然災害によって、住みにくいところとなったのです。

人間の罪の最も深刻な結果は、神との離別でした。神は罪を犯した人間を追放なさったのです。これは罪に対する刑罰のように考えられがちですが、むしろ罪を犯した人間を救おうとなさる、神の取り計らいと受け取った方が、良いように思われます。罪を犯した人間が、絶対に聖い神の近くに留まる訳にはいかないからです。神の聖さは、まさに焼き尽くす火のような性質を持っていて、穢れたものを焼き尽くし、滅ぼし尽くしてしまうからです。神は人間をお救いになるために、ご自分から遠ざけられたのです。

神から遠ざけられた人間は、神を離れたところで家族を作り、社会を形成していきました。そのようにして作られたのが、今の世界です。この世界は、神から離れた人間が作り上げた

ものであり、神の恵みから切り離され、罪にまみれ、罪に支配されています。それはまさにキリストが言われた通り、悪魔の支配の下にある世界であり、悪魔を君といただく世界です。

人間は自分が犯した罪のために、命の源である神から切り離され、生物学的には生きていても霊的には死んでしまって、滅びの世界に入ったのです。人間はやがて滅ぼされるのではなく、すでにこの世に生まれた時から、神の恵みを失った滅びの中に生まれ出たのです。人間は最初から罪の中に生まれ、罪の力に縛られて、生まれながらに罪人なのです。人間が罪人なのは、人間の血管の中にあるいは遺伝子の中に、罪の性質が宿っているために、罪を犯さずにはおれない罪人だというのではなく、罪が支配する世界、悪魔を君といただく世界に生まれ、罪を犯さずには生きて行けないために、罪人なのです。

罪の中に残る神の恵み

しかしこのような滅びの中でも、神は人間を恵み、良いものを与え続けてくださいました。人間からすべての祝福を奪ってしまわれたのではないのです。破壊されたとはいえ、自然はまだ基本的な秩序を保っていて、良い人間にも悪い人間にも太陽は昇り、雨も降るのです。罪に支配されているとはいえ、人間のすべてが破壊されてしまったのでもありません。人間には、壊され捻じ曲げられてしまったとはいえ、神に似せて造られた性質、人間の本性が、いまだにしっかりと残っているのです。

人間は悪魔の支配を受け、罪に牛耳られているとはいえ、まだまだ神に与えられた神に似た性質をもって、人間らしく生きようと戦っているのです。たとえ、すでに神が見えなくなり、誤ったものを神として拝むような事態に陥っていたとしても、神を感じ、神を拝み、神を畏れ、神を敬う心そのものを、失ってしまったのではありません。

何が正しいか何が悪いのか、判断さえできない有様に落ちぶれていたとしても、正しさを求め悪を憎む心は、本能として残っています。罪によって凶暴な気持ちが湧き上がってくるようなことがあったとしても、人間にはまだ、ひとを慈しみ、公平を喜び、愛し合う心が残っています。

世界はそのような、神に与えられた人間の基本的な性質、人間の本性によって保たれているのです。異邦人たちを救いようのない罪人として、一くくりに断罪してしまってはならないのです。しかもこの世界が悪魔の支配に陥ったとしても、この世界から神がいなくなってしまったのでも、神が完全に手を引いてしまわれた訳でもありません。神は今も、その絶対の権威ですべての存在物を支配し、人間の住むこの世界にも、悪魔の支配を破って介入し、救いを完遂しようとしておられるのです。悪魔のこの世の支配は、神の救いの計画で定めら

れている、わずかな期間だけに限られているのです。

とは言え、罪のために神から遠ざけられた人間が形成した社会は、非常に深刻な事態に陥りました。人間の本質の一つである霊的な性質は、たとえ神から離れていても、神を感じ霊的な世界を想い、何かを礼拝しないではおれないという、本能を保たせたままです。ところが人間は、神を離れて世代を重ねるうちに、創造者である神についての知識をどんどん失い、礼拝したい気持ちだけが本能として残ったのです。

偶像礼拝と第二の堕落

そこで、とんでもないことが起こりました。人間は礼拝すべき天地の創造者を見失い、代わりに偶像を拝むようになったのです。パウロの記述によると、神は人間の堕落の後にも、人間がご自分を正しく理解し、きちっとした礼拝ができるように、自然物を通して、ご自分を明らかに現わしておられたのです。人間は、自然物を通しての神の自己顕現、あるいは自己啓示によって、礼拝のために充分な神知識を得ることが、出来たはずでした。それにもかかわらず人間は、栄光の神に代えて滅ぶべき人間や、鳥や、獣や、這うものの像を造り、これらを礼拝し始めたのです。

この偶像礼拝に対して、神の怒りが激しく燃え上がりました。神は、罪のために傷つけられ捻じ曲げられた人間性を、そのまま放置してしまわれたのです。「神は、人間をその心の欲望のままに汚れに引き渡されました」とパウロは言い、「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました」とくり返しています。その結果人間は、まず、造られた人間の本来のあり方に背いた、同性愛という恥ずべき関係に陥ったと説明し、さらにありとあらゆる罪に捕えられてしまったと、21 にも及ぶ具体的な罪を列挙しています。（ロマ１：１８〜３２）

これはまさに、人類の第二の堕落とも呼べる出来事です。人間の深刻な罪の現状は、ただ単に、アダムとエバの罪の直接の結果だけではなく、神の明らかな自己啓示を無視した愚かな偶像礼拝のために、神が刑罰として、人間を欲望のままに任せられた結果だったのです。このような人間のあまりにも堕落しきった姿は、ノアの洪水という裁きの出来事で、一つの頂点を迎えました。このときの神の悲しみと痛みは、非常に大きなものでした。一人が滅びるのも望んでおられない神が、ノアの家族だけを残して、すべてを滅ぼし尽くされたのです。

最初の罪の堕落の結果、人間は神を離れてしまったとはいえ、人間は神からの自己顕現を得ていたのです。正しい神、天地の創造者を認識し、礼拝することが出来るようにされていたのです。それなのに人間は、神を神と認めず、被造物を神として拝みだしてしまったのです。その結果人間は、あらゆる汚れに突き落とされ、今見るような姿になってしまったので

す。

イスラエルの選びと律法の賦与・救いの準備

ところが神は、このように堕落し果てた人間を、何とか救い出そうと心を砕き、救いの道を備えてくださいました。その救いは、救い主、つまりキリストの贖いを通しての救いでした。その贖いによる救い以外に、救いはあり得ないのです。

このキリストの出現に至るまで、神はまず、キリストを迎えるにふさわしい人々を作ろうと、イスラエル民族に白羽の矢をお立てになりました。神は、ノアの洪水のあとの様々な人間たちの中から、アブラハムと言う一人の人物を選び、その子孫であるイスラエル民族に、救い主が生まれるように計画されたのです。その計画の実行のため、救い主が救いの働きをまっとうできるように、まずイスラエルが、救い主を迎えるにふさわしい民族になる必要がありました。彼らは堕落した人類の中で、天地創造の神をしっかりと知り、偶像礼拝を止め、この神だけを礼拝する民族になるべきでした。倫理的にも整えられて、義が広く及ぶ社会になるべきでした。そして、神の救いの計画も理解し、救い主を迎える準備がされるべきだったのです。

そのイスラエル民族の、教育と訓練と指導のために与えられたのが、ときには律法とも呼ばれている旧訳聖書でした。旧約聖書は、全人類の救いを目的として選ばれた、イスラエル民族に与えられた指導書だったのです。間接的には全人類のために与えられたと言うこともでき、その教えの中の普遍的な性質を持った部分は、全人類に適用できますが、直接的には、あくまでもイスラエル民族への指導書であることを、知らなければなりません。パウロは、救いが全民族に平等に与えられていても、イスラエル民族には律法を与えられているという特質があり、これが、彼らを他の民族とは異なったものにしているのだと言っています。（ロマ３：１～２）

そういうわけで、この罪の世界で悪魔の支配に苦しめられている人間、命の源である神から切り離されて、滅びてしまっている人間も、望みのないままに打ち捨てられているのではありません。神が救いを準備して下さっているのです。罪に陥り、悪魔に支配されている人間は、たとえどのように努力したところで、自分の知恵や力で自分自身を救うことはできません。ただ、人間を造りすべての物事を支配しておられる神だけが、人間を救うことが出来るのです。

ですから、いま私たちが生きているこの滅びの世界には、まだ希望が残されています。救われる道が準備されているからです。しかし、この救いの道を逃してしまうならば、もう、

望みは残されていません。そのために、新約聖書は今を恵みの時と呼び、（Ⅱコリント６：２）救われる希望の光のあるうちに、光を信じるようにと勧めているのです。（ヨハネ１２：３６）

罪人の裁き

聖書は、人が一度死ぬことと、死んだ後、裁きを受けることが定められていると教えています。（ヘブル９：２７）霊的に死んだだけでなく、罪の世に生を受けたすべての人間には、肉体的な、生物学的な死も定められています。その死の後に、すべての人間が、神の公正な裁きを受けるのです。おのおの、今の世界で生きた生き方によって、その行いに応じて裁かれるのです。

その裁きの時、この世界で罪の力に縛られて生きていた人、悪魔の支配を受けて生きていた人たちは、すべて、滅びの中に入れられるのです。この滅びは、今の滅びの世界の継続ではありますが、もう救われる望みが残されていない永遠の滅びです。そのために、神は救い主を送って救いの道を完成し、人々がこの永遠の滅びから逃れることが出来るように、いまの恵みの時に恵みを受け入れ、光のあるうちに光を信じるようにと勧めておられるのです。

この永遠の滅びが一体どのようなものであるか、聖書は詳しくは教えていません。とはいえ、旧約聖書が与えられていたイスラエル人、すなわち、天地の創造者である神について、単に被造物を通してだけではなく、旧訳聖書を通して、格段に明らかな自己啓示と自己紹介を受けていた、イスラエル人の裁きについては、断片的ですが、いろいろと教えられています。律法によって神のみ心が教えられ、何が正しく何が罪なのかを教えられていた、イスラエル人に対する神の刑罰は、キリストの教えや新約聖書の教えによって、ある程度知ることが出来ます。一言でいうと、非常に厳しい裁きです。

ところが、旧訳聖書が与えられていなかった異邦人の裁きと滅びについては、聖書はあまり語っていません。パウロは、律法(旧約聖書)を持っていない異邦人は、律法なしに滅びると語っていますので、律法を与えられていない異邦人が、律法を持っていなかったからと言って、裁きと滅びから免除されるわけではありません。あくまでも、罪を犯した者として滅びるのです。しかし、イスラエル人と同じ刑罰を受けるのではありません。

異邦人伝道において、私たちが犯してきた深刻な誤りの一つは、イスラエル人に与えられた厳しい裁きの警告を、異邦人にもそのままに適用して、語り続けてきたことです。その結果、異邦人に属する多くの人々は、キリスト教の神は非常に偏った不公平な神だ、一方的に自分の正義を押し付け、人間が置かれている苦難の状況に、一片の配慮もしない神だと感じ、

受け入れることが出来ないのです。異邦人も、正義と公平の神の性質を写し与えられているために、正義と公平をおろそかにする神は、認めることができないのです。

では、異邦人の裁きは何を根拠にして行われるのでしょう。パウロによると、「心に記されている律法である」と理解できます。（ロマ２：１２～１６）その心に記されている律法とは・・・・あくまでも聖書の記述をもとに考えると・・・神が人間にお与えになった人間の本性、神に似せて造られた性質であると言えます。パウロが、自分自身が自分に対する律法だとも語っているのは、そういう意味だと理解できます。

たとえ、神のより高度な自己掲示である聖書が与えられていなくても、人間は本能的に何が正しいか、何が正しくないかを理解しているのです。それは神の麗しい性質に似せて造られた性質が、人間の本性として与えられているためです。罪に堕落したとはいえ、人間の本性は完全に失われてしまったのではないからです。人間は本能的に善を求め、正義を追求し、愛を重んじるのです。神はその人間の本性を基準とし、心に記された律法として、人間の行為をお裁きになるのです。

ですから異邦人の裁きと滅びは、キリストがイスラエル人に向かって、描写されたようなものとは異なります。キリストはあくまでも、神の高度な自己掲示であり指導書である、旧約聖書を与えられていたユダヤ人を対象にして、お語りになったのです。それを異邦人全体に、そのまま適用することはできません。それはまた、黙示録に記されているような裁きとも異なっているでしょう。黙示録も、あくまでもユダヤ教の背景を色濃く残した、初期のクリスチャンたちに語られている、ユダヤ的なものだからです。

ただこの裁きは、あくまでも滅びる者たちの、滅びの段階、あるいは滅びの状態を定める裁きだと言うことを、理解しなければなりません。それぞれの行いに応じて裁かれるのです。神が与えてくださった神に似た性質に素直に従い、公平を愛し、正義を求め、優しさに生きた人は、その生き方にふさわしく裁かれ、怒りと、裏切りと、策略と暴虐をほしいままにした人は、その悪行に応じた裁きと刑罰を受けるのです。誰もかれもが同じ刑罰を受け、同じ滅びに落とされるのではないのです。

とは言え、どのような裁きを受けることになったにせよ、滅びは滅びであって、救いではありません。そこには神の準備した完全な世界はなく、人間性の完全な復元もないのです。神との完全な和解もなく、隔たりのない交わりもないのです。そこには救いの望みもないために、救いを目的とした神の介入も期待できません。それは救いではないのです。

救い

神が、キリストの贖いを通して準備された救いは、善良な生活をした人は死後の裁きで、良い報いを受けると言う程度で、終わるのではありません。全く次元が異なるのです。それは完全な救い、神との交わりの完全な回復です。

聖書は、今のこの世界が罪のために破壊され、捻じ曲げられたものであり、本来のあるべき姿からは、遠く隔たったものであることだけではなく、悪魔の支配と罪の拘束を受けた人間は、本来の人間に与えられた、生きるべき生き方が出来なくなって、やがて望みのない滅びに陥れられると教えていますが、神の救いは、これらすべての面に及ぶものです。

まず、いまこの世の君、あるいはこの世の神として、この罪の世界を支配している悪魔が完全に滅ぼされ、二度と再び、人間と自然界に悪を行うことが出来ないようにされます。次に、今の破壊された自然界がまったく造り変えられます。神は現在のこの世界を滅ぼし、まったく新しい世界を造ってくださいます。それは完全な秩序の中の麗しい世界で、天変地異はもちろんのこと、病もありません。それはパウロが、被造物全体が滅びの束縛から解放されると言っている、すばらしい出来事と同じだと考えられます。（ローマ８：１９～２２）そして神は、この完全な世界に私たちを入れてくださるのです。

しかし、その完全な世界に、いまの私たちのような不完全な者が、そのまま入れられることはありません。不完全なものは完全なものを受けることが出来ず、壊れたものが完全な世界に入ることはできないのです。どのように完全な世界でも、不完全な人間がそのまま入れられたのでは、不完全な世界になってしまいます。

そこで、今あらゆる意味で不完全な私たちは、まず、すべての面で完全な者とされなければならないのです。その完全さは、大きく二つの面に分けることが出来ます。一つは、私たちの肉体が完全にされることです。救われた者は、病気も、怪我も、生まれながらの弱さも、不完全さもまったく取り除かれて、完全な肉体を与えられるのです。それは、現在の肉体と全く同じものとは言えませんが、現在の私たちがいただく肉体なのです。次に、私たちの霊、あるいは心が、まったく完全なものに造り変えられます。完全な自然環境の中で完全な肉体を与えられて、互いに憎み、嫌い、争い、戦いながら生きたのでは、救いにはなりません。（参照Ｉコリント１５章）

その上、私たちに与えられる完全な救いは、神との交わりの完全な回復です。罪のために断ち切られた神との交わり、そのために失われた人間としての命の、完全な回復です。人間の本来の幸せは、単に完全な世界で完全な健康を楽しみ、人間同士の完全な愛の世界を楽しむことではありません。人間の幸せは、造り主である神との豊かで完全な交わりの中にある

のです。それは伝道の書の著者が、自分の身をもって実験をして、やっと見つけ出した真実と同じです。そのように人間は造られているのです。そのために、神から離れたままでは、人間はどのような環境にあっても、本当の幸せ、本当の満足を得ることが出来ないのです。その本当の幸せ、満足を喜ぶことが出来るのが救いなのです。

救い主キリストの出現

救い主は、神が旧約聖書を与え、知識の上でも倫理道徳の上でも信仰生活の上でも、教育と訓練を与えて救い主を迎える準備をさせられた、イスラエル民族にお生まれになりました。イスラエルの人々はすでに神の聖さ、人間の罪、神の裁きと救いの必要性、そして救い主の出現について教えられていたのです。

キリストの教えと模範は、直接的にはこのような背景を持ったイスラエル人に与えられたものです。しかしそれは、あくまでも普遍的な福音、つまり世界の全人類に向けて与えられる救いの一段階として、まず、イスラルに向けられたのです。当時のイスラエル人たちは旧約聖書を通して教えられた教えを正しく理解せず、救いはイスラエル人に与えられるものだと考えました。異邦人は例外的に、特別な条件を満たしてイスラエル人になることによって、初めて、この救いに与ることが出来ると教えられていたのです。

パウロの貢献･普遍的福音の理解の確立

キリストがお与えになる救いは、全人類を対象にしているという福音の普遍性の真理は、キリストの教えと活動の中にすでに示唆されていたのですが、神学的にしっかりと論じてこれを確立し、異邦人のための使徒となったのがパウロでした。とは言えパウロは、実際の異邦人伝道の経験は、さほど深くはありませんでした。彼の宣教は確かに異邦人の土地で行われたのですが、それは主に大都市のユダヤ（イスラエル）人の会堂の中でのことです。そこにいた異邦人は、すでにユダヤ教に改宗していたか、深く興味を持ち、同情し、同調していた敬虔な人たち、つまり、宗教的にも文化的にもユダヤ化した人たちでした。

パウロの宣教の経験では、彼が完全な異邦人に直接伝道した例は、ごくわずかです。使徒の働きの記録から見ると、アテネのアレオパゴスでの説教が唯一ですが、難船して、一冬滞在することになったマルタ島でも、間違いなく伝道したはずです。パウロが何も語らずに、一冬過ごすなどと言うことはあり得ないからです。でもここでは、一人の改宗者も出なかったようです。出ていたならば、ルカが書き漏らすこともなかったはずです。

異邦人の使徒パウロ、華々しい伝道の成果を上げたパウロも、マルタ島のような僻地に住

む、完全な異邦人を救いに導くことは、困難を極めたのでしょう。その他、エペソやコリントでも、まったくの異邦人に直接伝道したことがあったかも知れませんが、記録に残すほどの成果を上げていません。ただ、事前に神の奇跡の業を見せられ心を開いていた、キプロス島のセルギオ・パウロやピリピの獄吏とその家族の救いのような例は、いくつかあったと考えられます。

パウロの神学の限界

つまりパウロは、普遍的な福音の神学を打ち立てたということでは、異邦人への偉大な使徒でしたが、実際の異邦人伝道という面では経験も少なく、深い理解を持っていなかったと言えるのです。現在の日本のような完全な異邦人を相手にした、長期間にわたる伝道は、パウロにとって未経験であり、その問題について深く考えることもなかったと思われます。もしも彼が、マルタ島のような土地で、少なくても数年間の伝道経験を積んでいたならば、事情はずいぶん異なっていたことでしょう。

パウロは信仰による義という神学を打ち立て、福音の普遍性を明確にしました。しかし異邦人伝道の経験が少なかった彼は、あくまでもユダヤ人の視点から、福音は異邦人にも及ぶと言うことを語ったものです。救いは初めから、人類全体に向けて準備されたものであり、イスラエルはその目的の遂行のために、用いられたに過ぎないとう前提で、つまり、異邦人の視点から福音について語ることは、ほとんどなかったのです。それがパウロの神学の限界でした。

パウロの神学に留まっている西欧神学

私たちが継承して来た神学は、このパウロの神学でした。パウロが据えた「普遍的救いの神学」の土台の上に、まだ「異邦人の神学」が築かれていないのです。異邦人全体が取り扱われておらず、論じられていないのです。まだまだイスラエル人に語られたこと、イスラエル人に与えられた律法を、直接異邦人に当てはめているのだけで、しばしば的外れのことを言っているのです。

例えば、人間に与えられた神に似た姿という、基本的な性質から発する宗教本能を軽んじ、罪悪視して糾弾する間違いです。偶像礼拝は間違っています。しかし、神を礼拝したいという本能の欲求は、罪ではないばかりか、人間が人間であることを証明するものなのです。また、神の特別な自己啓示を受け、天地創造の神と言う存在を明確に教えられ、偶像礼拝を禁じられているイスラエル人が、それでも偶像礼拝をする罪と、神の自己啓示は自然を通してだけという、異邦人の偶像礼拝の罪を同等に扱うのは、非常に不公平です。当然、キリスト

教以外の宗教に対する私たちの態度も、改められなければなりません。

異邦人の神学が築かれてこなかった理由の一つは、西欧キリスト教の歴史の中で、キリスト教徒たちが、常に、自分たちこそ霊的なイスラエルであり、本物のイスラエル人であると考えて来たことです。学問的には、彼らも異邦人であることを認めたかもしれませんが、そのような自覚はほとんど持っていませんでした。イエスを十字架につけた時、「その罪は、我々と我々の子孫の上にかかってもいい」と言い放ったユダヤ人たちは、神の祝福から除かれて、自分たちクリスチャンが本物のユダヤ人になったのだと考え、それがいつの間にか、「キリスト教文化」に生きるほとんどの人々にまで、及んでしまったのです。

自分たちを異邦人であると認識しなかった、西欧「キリスト教文化」に生きた人々は、当然、旧訳聖書も新約聖書も直接自分たちに与えられたものと単純に思い込み、そのように読み、そのように解釈しました。そして、旧訳聖書を与えられ、神と罪と救い主について知っていた、イスラエル人に向けて語られたキリストの言葉を、そのまま自分たちの伝道の対象にも語ったのです。それでも、「キリスト教文化」にいた人たちは、その伝道を受け入れることが出来ました。特に、近代プロテスタントの伝道には、それが顕著であったと思われます。今の私たちの伝道の模範と言うか、走りとなったウエスレーの悔い改めを迫る大衆伝道などに、それが見事に現れています。

さすがのパウロ神学

ただしパウロの神学には、異邦人に関しても、さすがと思わされるところがあります。例えば、この文章でも取り上げたロマ書 1 章の偶像礼拝は、イスラエル民族の偶像礼拝とは異なる、全民族の偶像礼拝の問題だという点を、パウロは述べているのです。イスラエルが偶像礼拝をする罪と、イスラエル以外の人々が偶像礼拝をする罪は、同様の問題でありながらまったく異なっていることを語っています。異邦人の偶像礼拝の罪は、モーセの律法を破る罪ではないのです。パウロは、「律法の言うことはみな、律法の下にある人々に言われていることを知っています」と語って、モーセの律法が異邦人に適用されてはならないことを示しています。（ロマ３：１９）

また、律法を与えられていない異邦人は、律法なしに滅びるということ、たとえ異邦人がモーセの律法を持っていなくても、心に記された律法を持っていて、それが裁きの基準になることも語られています。（ロマ２：１２～１５）これは異邦人宣教をする上では強調しすぎることが無いほど、重要な点です。この問題をしっかりと理解するならば、私たちの異邦人伝道の方法、異邦人へのアプローチはずいぶん異なったものになるはずです。

モーセの律法と心の律法は、同じ神から与えられたものであり、原則的にこの二つの律法の間に矛盾はないはずです。ところが、実際に見える部分は随分異なっています。それはモーセの律法が、神の救いの計画のために特別に選ばれた、特殊な民族の特異な必要のために与えられたものであるのに対し、心に書かれた律法は、人類全体の一般生活のために与えられているからです。どちらがより原則的なものであるかは明白であり、どちらが異邦人にとってより大切なものであったかも、論を待ちません。そのような点が、西欧神学ではまったく論じられないままになっているのです。

異邦人の躓き

多くの日本人は、旧訳聖書を読むとそのむごたらしさに、眉をひそめます。人間の本当の姿があからさまに描き出されていることには、納得し、感動さえすることもありますが、あまりにも残虐であり、血が流され過ぎるのです。聖書を持たず、心の律法によって行動している日本人には、聖書の教えはあまりにも峻厳であり残酷です。その物語は人間性に反すると思われるのです。これは日本人だけではなく、多くの平和を好む異邦人が同様に感じるものなのです。

現在、西欧諸国の教会がどんどん弱小化し、人道主義的な動き、平和だとか、愛だとか、平等だとか、基本的人権と言うような事柄に、一致を見つけて行動している人々がたくさんいます。彼らは、「キリスト教文化」に育ちながら、自分の心が命じることと聖書の教えは、合致しないと感じています。世俗主義が強まり、「キリスト教文化」が弱くなった西欧では、多くの若者たちは、もはや自分たちを霊的ユダヤ人などと見ることを止めて、異邦人の感覚を持ち始めているからです。そういう彼らは、聖書の教えではなく、自分たちの中にある心の律法、心の叫びに耳を傾けるのです。

多くの日本人も、そのような人々と分かり合い、行動を共にできるのですが、福音派のクリスチャンや原理主義のクリスチャンとは、分かり合えないのです。福音派や原理主義のクリスチャンは、いまでも旧訳聖書を含む聖書全体を、自分たちに与えられた尊い神の言葉と信じて、その教えや律法をそのまま大切に守ろうとするためです。律法と呼ばれる旧約聖書は、特殊な目的のために選出されたイスラエル民族の、特殊な必要性のために与えられたものであり、その中に記されている多くの教えや出来事は、一般化されてはならないものです。つまり、イスラエル人以外の人々に適用されてはならないものです。その中にある、普遍的な性質を帯びたものだけが、だれにでも用いられるべきなのです。

特殊な国日本

ではどうして、日本だけがクリスチャンの少ないままで、留まっているのでしょう？　日本以外の多くの国々、特に、西欧諸国を除いたいわゆる開発途上国では、圧倒的にキリスト教に宗旨替えしている人々が多いのです。統計上は、回教徒の増加速度の方が早いことになっていますが、それは出生率にも関わっているためです。

本当のところ、回教などの宗教を国教としたり、それらの宗教以外の布教を禁止したりしている国々でも、日本と比較すると、急速にクリスチャンの数が増え続けている例が幾つもあります。ほとんど完全な信教の自由と、宗教活動の自由を与えられていながら、伸び悩んでいるのは日本のキリスト教だけです。いったいどうしてでしょう？

そこにはいくつかの理由が考えられますが、一般的に言って、開発途上国が容易にキリスト教を受け入れている背景には、その国や民族の国家意識あるいは民族意識が低く、武力も弱かったこと、次に、キリスト教に対抗するだけ発達した強い宗教が無く、キリスト教の神学や哲学の浸透に、抗しきれなかったことが挙げられます。

カトリックの宣教

まず、カトリックが国教または準国教扱いになっている国々の多くは、いわゆる大航海時代に、カトリックの太国であったポルトガルやスペインによって征服され、武力で改宗させられたものです。カトリックの宣教は、国家権力と武力を後ろ盾としたものでした。中南米の国々はみなそのようにして征服されました。アフリカにもそのような国があります。アジアではフィリピンがその例に入ります。

それらの国々は、まだ国家としてのまとまりがなく、侵略してくる大国と戦う武力も持っていなかっただけでなく、カトリックに対抗できるだけ整った宗教もありませんでした。そのために、侵略者の宗教を一も二もなく受け入れてしまったのです。とはいえ、宗教と言うものは非常に根強いもので、武力の支配や体裁の取り換えだけでは、覆すことができないものです。そのため、カトリックが征服したのはうわべだけで、その内部は、いまだに土着の宗教のままと言うのがほとんどです。

ちなみに、中南米やフィリピンのカトリック信仰を、本物のカトリック信仰と認めていない、カトリックの神学者がたくさんいます。土着の信仰がカトリックの衣をまとっただけであると、彼らは考えています。また、それがカトリックであると、冷めた考え方をしている神学者もいると言うことです。

そのような中途半端なカトリック信仰の国々で、いま、私たちのようなペンテコステ信仰

が、非常な勢いで伸びているというのは、とても面白い現象です。国家と結びついて腐敗した、古い権威主義の宗教に失望した人々が、新しく語られ始めた聖書の教えに耳を傾けているのです。彼らは、自分たちの国家と宗教文化に失望しているのです。

プロテスタントの宣教

大航海時代のカトリックの宣教から数百年遅れて、プロテスタントの宣教が始まりました。予定説に影響されていたプロテスタントは、当初、カトリックほどの宣教の情熱をもっていませんでしたし、国家権力と武力を公に後ろ盾して、強制的に改宗させることもありませんでした。それでも、宣教の情熱を持った少数の個人や宣教団体が現れ、徐々に、近代のプロテスタントの宣教が盛んになってきたのです。

このときのプロテスタント宣教は、西欧キリスト教諸国の植民地政策と結びついていました。公に国家の武力を後ろ盾とはしていなくても、勢力を付けて来たプロテスタント諸国が力を入れていた、植民地政策による侵略に便乗して宣教が行われたのです。とくに、侵略した地域の経済支配のためにヨーロッパ列強が設立した、東インド会社が大いに利用されました。当時インドとは、ヨーロッパと地中海沿岸以外の地域を指す言葉で、次々と植民地化したこれらの地域で経済活動をするために、特許会社として設立したのが東西のインド会社です。アジアで活動したのは東インド会社、南北アメリカで活動したのは西インド会社ですが、東インド会社の方が強大でした。

このような植民地政策に乗った宣教に対抗できたのは、ある程度国家や民族としての統一が出来、強い武力を蓄え、発展した宗教による精神的な一体感があった人々です。ただそのような国家や民族は、ごくわずかと言うより、ほとんど存在しなかったのです。たとえば、中国はある程度の武力を持ち、宗教的にもそれなりに深いものを持っていましたが、アヘン戦争で圧倒的なイギリスの力に屈してしまいました。もう一つの例はタイでした。タイは強い武力を持っていたわけではありませんが、王政を採る民族国家として、かなりのまとまりを持っていましたので、イギリスとフランスと言う対立する植民地主義国家の力を、うまく利用して独立を保つことができました。その上、仏教と言う国家宗教が強い精神的後ろ盾となっていました。

プロステスタント諸国に植民地とされた国々では、プロテスタント教会の宣教が行われましたが、カトリックほどの強大な武力による強制はなかったために、中南米のような状態にはなりませんでした。特にアジアの国々には、回教と仏教と儒教があり、かなり高度な哲学があって、キリスト教が容易に入り込む隙間が無かったのです。（フィリピンがカトリック化したのは、まだ小さな部族の雑多な集合にすぎず、国家としてのまとまりがなかった時

代、仏教も回教も儒教も浸透していなかった時代に、植民地とされたためです。）

日本の反キリスト教意識

大航海時代のポルトガルとスペインの力を背景に、カトリックが侵入してこようとしていた戦国時代末期の日本は、混乱の中にありながらも、他の国々では考えられないほど、民族としての統一意識と強い武力を持っていました。日本の為政者はカトリックを侵略者の手先として排除したのです。プロテスタントの植民地主義国家と対峙した日本も、明治時代を目前にした黎明期であったとはいえ、他の国々や民族とは比較にならないほどの、国家意識と武力を備え、宗教的にも哲学的にも、固い基盤を備えていました。

大航海時代のカトリックの侵略を防いだ日本には、強力な反キリスト教文化が作り上げられていました。明治直前からのプロテスタントの宣教は、この反キリスト教文化によって妨げられたのです。カトリックを侵略の手先と見た日本の為政者の感覚は、250 年後のプロテスタントの宣教の背後にも、植民地主義者の意図を嗅ぎとったのです。アヘン戦争で事実上中国を植民地とし、続いて日本を支配しようとしたイギリスの策略は、本国と日本での様々な要因が複雑に絡み合っていたとはいえ、日の目を見ないままに終わりました。ドイツも、フランスも、ロシアも、オランダも、アメリカも、それぞれ自国周辺の事情も絡み、日本を植民地にすることはできませんでした。キリスト教の宣教師も大挙して押し寄せましたが、あらたに国家神道を据え、和魂漢才に代えて和魂洋才を掲げた、日本の国家意識を打ち破ることも、精神文化を切り崩すこともできなかったのです。

このような国民的伝統は、戦後の一時期のアメリカに対する憧れによって壊されかけたものの、現在の日本でもしっかりと引き継がれています。それが、他の多くの国々と日本が異なっているところです。多くの日本人にとってキリスト教は、教育や福祉などの分野では数々の貢献をした良い宗教でありながら、日本と言う国家を侵略しようとした西欧諸国の手先であり、日本の奥深い宗教と文化を敵視し、和の文化を根底から壊そうとする、好ましくない宗教なのです。

ちなみにお隣の韓国は、日本とよく似ていると言われますが、こと、キリスト教に関してはまったく事情が違います。中国と日本に治められ、ロシアの侵略を受けそうにもなりましたが、韓国は、キリスト教国の侵略を受けたことがありません。韓国人にとってキリスト教は、自分たちを助けてくれたアメリカの良い宗教であり、進んだ西洋諸国の美しい宗教なのです。そのために、実質は別として、韓国にはキリスト教徒と呼ばれる人々が多いのです。

日本人の疑惑と怖れを助長する伝道方法

徳川幕府は、ありとあらゆる手段をもってカトリックを阻止しようとしました。そのために仏教が大いに利用されました。幕府の策にまんまと嵌まった民衆は、ただいたずらにキリスト教を恐れ、排除しようとしました。一方、明治の直前に、植民地政策を進めながら日本に近づいて来た国々は、行く先々、侵略するところすべてで、人道にもとる残虐な行為を、神が自分たちに与えた当然の権利であるかのように、執拗にくり返していました。その残虐性の精神的土台がキリスト教だということを、明治の為政者たちは学び取ったのです。徳川幕府が採った鎖国と迫害の政策をくり返すことはできませんでしたが、キリスト教を排除しながら、植民地政策国家の精神土台に対抗できるものとして、和魂洋才を掲げ、国家神道を置くことにしたのです。日本人は、人間性に反することを平気で行うキリスト教を恐れ、疑惑を持ち続けてきたのです。その疑惑がわずかながら薄れたのが、戦後の民主主義に乗って入ってきたキリスト教に対してだったのです。

キリスト教の伝道は、優越感と共に行われてきたことも、忘れられてはなりません。宣教師たちは、武力、経済力、科学知識など、ほとんどあらゆる分野で先を行っていた、西欧諸国から来ていました。その上に、白人としての人種的優越感を公然と持っていました。白人以外を人間と認めないのが一般的であった彼らの母国から、あえて有色の人々を人間と認め、福音の対象として認識して、危険を冒してまでも旅をして来たことは大いに賞賛すべきですが、宣教師たちの優越感は、伝道される側からすると非常に屈辱的でした。

その上、「キリスト教文化」至上主義をもって、日本の文化を遅れたもの、劣ったものと断じて、これを排除し、自分たちの文化を押し付けようとしました。さらに、本来イスラエル人に向けて与えられた、聖書の教えを直接日本人に適用して、すべての宗教を邪教と断じ、忌むべきものとして糾弾し、日本人は偶像礼拝者である、罪人であると叫び続けました。異邦人に対する配慮は少しもなく、自分たちも異邦人であるという認識にも欠けていました。このようなキリスト教に対し、日本人の多くは、徳川時代の初めころからキリスト教を恐れて来たのは、正しかったと思ったのです。

そのような日本人の感覚は、戦後の民主主義国家アメリカの美しい宗教、キリスト教をもってしても拭い去ることが出来ませんでした。ですから、いくらか良くなりかけたキリスト教のイメージも、ベトナム戦争を境にたちまち色あせて来たのです。マッカーサーの情報操作と偏向教育を受けて育った戦後世代の私たちは、西欧諸国は麗しい国々であると教えられてきました。その支柱となっているキリスト教は、素敵な宗教であると思い込まされてきました。マッカーサーは、日本をアメリカに都合の良い国に仕立てあげようと、あらゆる手を尽くし、キリスト教も利用したのです。彼は 3000 人とも 5000 人とも言われる宣教師を呼び寄せ、日本中の教会をアメリカかの救援物資の分配所にして、キリスト教を浸透させよ

うとさえしました。

それでも、ユダヤ主義から脱却していないキリスト教精神、選民意識のキリスト教信仰は、日本人が取り入れるべき良いものとは、みなされませんでした。ただ、戦後の教育を素直に受け、アメリカやキリスト教に好感を抱くことが出来た人たちの中から、ごく少数の者たちがキリスト教を受容しました。そしてこの短い期間が、日本の宣教の絶頂期だったと言われるのです。

私たちがやるべき伝道

日本人である私たちが日本人に福音を伝えるとき、キリスト教ではなく、福音を語ることが最も大切です。キリスト教の素晴らしさを伝え、キリスト教の魅力で納得させようとするのではなく、純粋に福音を伝えることに集中すべきです。クリスチャンがどんなに素晴らしい人種であり、どんなに偉大なことをやってきたかという、我田引水の話もやめましょう。西洋美術、西欧音楽、西欧文学、西欧文明が、キリスト教を土台にしているなどと言って、西欧コンプレックスの、日本人の興味を引こうとしてもなりません。たとえキリスト教が、多くの良いことをしてきたことを認めたとしても、犯し続けた悪事の方がよほど大きいことでしょう。

歴史を直視すると、キリスト教と呼ばれる宗教は、他のどの宗教よりも血塗られた宗教であることが分かります。今やマッカーサーの偏向教育、思想統制教育から解かれた日本人たちが、それに気づき始めているのです。伝道とは、キリスト教を伝えることではなく、福音を伝えることであると、しっかりと確認し直しましょう。

福音とは何かを理解し直す

「イエスキリストが、私たちの罪の刑罰を身代わりに受けて、十字架で死んでくださったことを信じるならば、たとえだれであっても、何の行いもなしに救われることが出来る。」これが、私たちプロテスタントのクリスチャンが金科玉条として来た、福音の真髄です。でもこれは、聖書の教えから大きく外れています。

第一は、これは「何の行いもなしに」と、一応無代価の救い、行いによらない信仰による救いを謳ってはいますが、その実、「私たちの罪の刑罰を身代わりに受けて、十字架で死ぬ」という、とても難しい神学を理解しなければならない、とても困難な「行為を」前提とするからです。そんなことは一切理解しなくても、まったく知らなくても救われるのが、「行いなしに」救われることであるはずです。キリストの十字架は、十字架の理解なしにも救われ

るためにあったはずです。

第二は、このような信条や神学を信じて救われるのは、キリストの福音ではないと言うことです。信じるべきは、教理でも信条でも神学でも、もっと極端にいうなら、聖書の細々とした教えでもなく、キリストと言うお方、人格を持ったお方なのです。人格を持ったお方を信じると言った場合、そのお方についての情報を信じると言う意味でもありません。そのお方に信頼する、頼ると言う意味です。「信じる」の意味が違います。

第三に、このキリストと呼ばれるお方が、かつて、私たちのためにどんなことをしてくださったかを知り、それに感動して、感謝して、お礼を言って信じることでもありません。それもまた、知識という、困難な行為を前提とすることだからです。かつてこのお方が、私たちのために何をしてくださったかと言うことを知らなくても、このお方に信頼すればよいはずです。

第四に、私たちの伝道対象である日本人は、旧訳聖書を与えられておらず、キリストと言うお方を知りませんので、キリストを信じると言うことが意味不明になります。キリストはあくまでも、旧訳聖書で救い主の出現を約束されていた、ユダヤ人に対する約束の成就の福音であって、異邦人である日本人には福音になりません。

日本人にとっての福音

私たちが語る福音は、あくまでも、旧新約聖書を通して私たちに啓示された、福音でなければなりません。福音は、あくまでも、キリストを通して成し遂げられた贖いのみ業です。十字架の身代わりの死によって完遂された、神の救いの働きであり、復活によって可能にされた、聖霊による新しい命です。

とはいえ、それらの福音の内容は、異邦人である普通の日本人には、まったく馴染のない宗教的な話、形而上学的な学問にすぎません。よほど特殊な人以外には、興味を持てないものです。頭痛薬を買いに来た人に、頭痛についての知識、その薬に含まれているいろいろな成分の知識と含有量についての知識、さらにその薬が開発されるに至った経路、それに関わった人たちの苦労話などを、いちいち説明していたのでは、買う方も売る方も疲れてしまいます。最低の知識でいいのです。

日本人の救いのために、最低限必要な知識はどこまでなのでしょう。頭痛薬を買う人には、少なくても、頭痛に効く薬があるという情報が必要で、薬屋に行けば買えるくらいの知識が必要です。それから、頭痛にはいろいろな種類があり、薬もそれによって違うし、服用の仕

方も異なっていることくらい、知らなければならないでしょう。それ以上の知識も大切ですが、いま頭痛で困っているとき必要なのは、僅かの知識です。

私たちは聖書の福音を語ります。しかし、日本人にわかり易く、日本人に受け入れられやすくするために、まずは最低限の知識を与えるだけで良いのです。深い福音の真髄、高度な神学的理解は後に譲りましょう。頭痛薬の説明は、頭痛が薄らいでからで良いと言うことです。福音は、日本人にとっても福音とならなければ、福音ではないのです。

日本人の本能的宗教感覚に語り掛ける

日本人福音を語るとき、キリストの話から始めるのは、頭が痛いからと頭痛薬を買いに来た人に、アセテルサリチル酸（アスピリンのことです）やヒドロタルサイトについて、講釈するようなものです。これでは現実の必要に対応できないのです。せいぜい、何か特殊な頭痛ではないことを確認して、間違いが起こらないようにするくらいが普通です。

日本人にも、神の姿に似せて造られた人間の本性があります。その人間の本性に語り掛ける伝道が大切です。旧新約聖書に啓示されている福音を、旧新約聖書が与えられていない日本人に、わかり易く、受け入れやすく語るためには、旧新約聖書の教えをそのまま語るのでは、薬についてまったく知識が無い人に、アセテルサリチル酸について一所懸命に説くようなものです。常識でわかる程度の説明で良いのです。

ごく普通の、日本人の宗教意識に語り掛ける伝道が大切なのです。神に似せて造られた日本人は、神を感じ、認識する力を本能として持っています。しかもその本能は、多くの異邦人ほどには、栄光の神の姿を朽ちる偶像に代えてはいません。日本人には、多くの民族にありがちな偶像礼拝が、非常に少ないのです。そのために、日本人には高度な神感覚が残っているのです。

日本人の宗教感覚

クリスチャンたちの間で行われている、日本人の宗教意識についての学びは、西欧キリスト教的な先入観による分析や、一方的な断罪が多くて、公平な学びが少ないように思われます。特に、日本人本来の宗教感覚を、もっともしっかりと保っている神道については、非常に浅い学びしかできていません。神道が理屈を嫌う宗教であって、神学を持っていないために、学問的な取り扱いができないことも影響しているのでしょう。

日本人の宗教感覚は、実にややこしく絡み合って、容易に説明できるようなものではあり

ませんが、ここではとりあえず、本来の人間に与えられている神知識に近い、より高度な宗教感覚と、そこから徐々に堕落して来た感覚に、分けて考えてみましょう。

高度な神意識

日本人の中には、「神はいない」と言い切る人が少なくありません。彼らが普通に言うところの神、あるいは神々を信じていないのは、彼らに宗教意識が無いからではなく、むしろ、彼らが高度な宗教意識を持っているからだと言うことが、少なくありません。日本語でいう「神」、あるいは「神々」と言うものが、あまりにも愚かで、自分のうちにある高度な宗教意識では、そのようなものを崇め、敬い、礼拝することが出来ない、認めることが出来ないと感じるからです。お付き合いや礼儀で宗教行事に参加したりすることはありますが、普段は無宗教のようにふるまい、偶像礼拝とも無縁です。

彼らの多くは、自分には礼拝すべきものなどないと、唯物論的な無神論を主張しているのではありません。むしろ自分は、言葉でも絵でも像でも表現できない大きな存在に、命を与えられている、生かされている、見守られていると強く感じながら暮らしています。その大きな存在が、日本語で言う神や神々のような、ちっぽけな存在ではあり得ない、あってはならないと感じているのです。

また日本人は、その大きな崇高なお方について、理解しようとなどは思いません。むしろ、知ろうとすることなど恐れ多く、説明しようなどとはおこがましいと感じているのです。そのお方は、不注意に近寄ってはならないお方、名前をもって呼ぼうなどと考えてはならないお方なのです。そのお方のことを想うと、何故かしら、自分は小さく弱く穢れた存在だと感じてしまうのです。人間の理解も理屈も想像も空想さえ及ばない、不可思議なお方だと、本能的に心得ているのです。

このような日本人こそ、聖書に啓示されている天地の創造者であるお方を、感覚として理解できる人たちです。そしてこのような日本人は決して少数者ではありません。実際のところ、程度の低い八百万の神々を認めている日本人たちも、同時に、このような高度な宗教意識を持っていることがよくあるのです。ですから、彼らの高度な宗教意識を引き出すようにして話し合うならば、容易に、創造者を認めることができるのです。彼らは唯一の存在者や、時間と空間を超越した存在者、あるいは、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる恵み深いお方を、認めることができるのです。

気高く尊い唯一の存在者を感じる、高度な宗教心を持ちながら、この存在者はまたすべての自然物に潜んでいる、あるいは宿っていると信じている人たち、唯一神論的汎神論感覚の

人たちもいます。これもまた、聖書に啓示されている神と矛盾するものではありません。聖書の神はすべてのものを創造された神ですが、同時に、すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの中に存在し、すべてのものを内に収めておられる方だからです。したがって、このような神感覚を持っている日本人には、比較的容易に、聖書にご自分を啓示された神を紹介することが出来るのです。

中程度の神意識

唯一の存在者を感じ、その方を崇めようという感覚は、ちょっとした油断で、すぐに廃頽してしまいます。その廃頽の途上にあるのが、神宮とか大社などと呼ばれるような大きな神社、あるいは歴史と由緒のある神社に祀られている、神々を拝む感覚です。これは絵でも像でも言葉でも表現できない高貴な存在者を、特定の神の名をかぶせて礼拝するものです。見えない栄光の存在者を、何とか見えるものにしたいという欲求の表現です。

それでもこの場合、神社に祀られている神、あるいは神々は、まだ目に見えない存在のままです。神社の中に祀られているのは、偶像ではなく、見えない存在を表現する象徴的なものです。いわゆる、依代となるものです。それはちょうど、イスラエル民族にとっての契約の箱や、その中に収められていたもの、あるいは幕屋や神殿全体と同じです。それらは神の臨在を象徴していました。イスラエル人たちは、偶像礼拝はしませんでしたが、それらのものを依代として、見えない神を礼拝していたのです。

厳密に考えると、日本の神社などの依代としての役割は、偶像礼拝に陥って行く過程のひとつと思われ、イスラエルの神殿礼拝とまったく同じと言い切れませんが、見えない神を身近に感じさせる依代であると言うことに、違いはありません。日本人は、春日神社に行こうが八幡神社に行こうが、まったく同じ気持ちで礼拝（らいはい）します。天照大御神を祀った神宮に詣でても、大黒様を祀った大社に参拝しても、同じ感覚です。小さな社や祠に手を合わせても、同じ気持ちです。多くの場合、それらの表面に現れた神々は、その背後におられる大きく気高い、唯一の存在者の依代だと感じているため、そこに、神の像が無くてもいいのです。ご神体などと呼ばれるものも、実際は神の姿を刻んだものではなく、象徴するもの、依代となるだけのものがほとんどです。

低度の神意識

汎神論的な神を信じる宗教感覚には、もう一段低い、少しばかり堕落した感覚もあります。すべての自然物には、多くの霊、あるいは神々が宿っているという感覚です。多神論的汎神論とも言える神感覚です。これは容易に多神教に移っていきます。

すべてのものを恵みによって照らし、生かしていてくださるお方の依代として、天照大御神を祀りご来光を拝むのは、まだ高度な神意識を表現しているとはいえ、そのような神意識を持っている日本人は、同時にまた、八百万の神々も認めていることが多いのです。そこに、明白な自覚も区切りも境界線もありません。そのために混乱してしまうのです。そこへ、日本人は自分が持っている高度な神意識を、説明しようと思わないことも加わって、ますます混乱してしまうのです。

一般の日本人の低度な宗教感覚では、宗教の対象にさえなりにくい、お化けや妖怪、幽霊や物の怪から始まり、仏教的な感覚も混入して、前世や死後の世界、地獄や天国、さらには死後に仏になるとか、生まれ変わるとかいう概念までも併せ持っています。さらに、神道的な感覚と仏教的な感覚が入り混じって、様々な神々の偶像を拝んでいる場合さえあります。ただしこれらの神々は、助けを求める対象にはなり得ても、崇め敬い礼拝する対象にはならないのが普通です。例えば、子宝に恵まれたい女性が、男根に似た鍾乳石に祈願し、子供が生まれたときには感謝の捧げものをするのは普通です。しかし、その石を崇め敬い礼拝することはまずないのです。

このような混乱した感覚は、普通、アニミズムという未発達で低級な宗教観とみなされます。クリスチャンたちは、これを堕落した偶像礼拝と断じて、糾弾します。しかし私たちは、このような宗教観、あるいはある種の世界観は、聖書の宗教観、世界観と相通じるものと見るべきなのです。聖書が用いている用語は、ヘブル語やギリシヤ語で、日本語とは異なった意味合いを含みますが、要するに、この世界は見える物質の世界だけではなく、見えない霊的な世界とつながり、一緒に存在していると感じているのです。

日本では、怨霊が徘徊し、死霊がさまよい、魑魅魍魎がばっこしています。狐の霊が悪さをしたり、蛇の霊が憑いたりもします。聖書の世界では悪霊が病気を起こしたり、汚れた霊が害を与えたりする一方、み使いがいて人間を守ってくださることもあります。聖書の世界も、アニミズムの世界なのです。この世界は第三次元だけではなく、み使いの世界も、悪霊の世界も、死後の世界も、良いことをして死んだ人が行く世界も、悪いことをして死んだ人の行く世界も含めて、たくさんの次元からできています。

日本語の「神」と言う言葉は、本来「うえ」と言う意味です。人間より力のある存在はみな人間より上、つまり神とみなされて神々となり得るのです。したがって、人間にはできないこともすることができる悪霊もみ使いも、日本語で言うならばみな「神」なのです。子供が出来ない女性にとっては、ネズミさえ神になり得るのです。沢山の子を産む力を持っているからです。聖書の世界の悪霊も汚れた霊も、み使いたちも悪魔でさえも、日本語では神な

のです。しかも、そのような言葉の使い方は、聖書でさえ、悪魔を「神」と呼んでいるほどで、日本語だけの特徴ではないのです。

ですから私たちクリスチャンは、日本の宗教土壌や日本人の宗教意識を、ことさら軽蔑したり、安易に断罪したり糾弾したりするべきではないのです。むしろ、そのような霊的状態に憐れみを持って接し、混沌の中から人間の本性に通じる高度な神意識を探し出し、それに触れ、それを通して、天地の創造者であるお方について理解してもらうのが良いのです。

信仰による救いを徹底する伝道

このような異邦人の特徴を持っている日本人には、信仰による救いの神学を深く理解し、それを徹底して伝道を進めて行くのが良いと思います。パウロはユダヤ人も異邦人も同じ原則によって救われるという、普遍的な福音の神学を確立しました。行いを必要としない救いが真髄です。その神学をただの学問上の問題に止めず、伝道の働きの上でも実践していくのです。

パウロが、信仰による救いと言う普遍的な福音の神学を論証し、人々を説得するときに用いたのは、アブラハムが神を信じて義とされたと言う、創世記の記述です。パウロは「キリストを信じて義とされる」と言う議論を、何の説明もしないまま、突然、アブラハムが「神を信じて義とされた」という議論に、飛躍させています。旧約聖書の救い主の預言から、キリストへの信仰に至った「パウロにとって、「神を信じる」ことと「キリストを信じる」こととは、まったく同じであって、飛躍でもなんでもなかったのですが、私たち日本人にはとんでもない飛躍です。

多くの神学者が何の言及もしないまま、通り過ぎているこの点こそ、私たち異邦人にとっては大切なのです。なぜなら、このときのアブラハムは、すでに選ばれ召しだされてはいても、まだ律法を与えられていない状態にあったからです。いわば、まだ異邦人と同じ立場にいたと言えるのです。

律法を与えられていなかったアブラハムは、後になって、イスラエルに対して律法によって自己啓示をしてくださった神については、知りませんでした。神についての知的理解はまだまだ不十分だったのです。救い主についても、罪についても、十字架についても、代償の死についても、悔い改めについても知りませんでした。彼の神知識は、基本的に、異邦人の神知識であり、神に似せて造られた人間としての、本能的な神知識、本能的な神感覚によるものであり、彼個人の信仰生活を通して培われたものです。

その「神を信じた」という彼の信仰は、現在のクリスチャンたちがいう信仰とは、かなり性質が違うものでした。それは「信仰」というより、「信頼」と言った方が良いものです。アブラハムは、神学を信じたのではありません。教理を信奉したのでもありません。理屈を受け入れたのでもなく、教えを受容したのでもないのです。彼は、神と言うお方を信頼したのです。彼に現れて語りかけてくださったお方に頼ったのです。その信頼を神は受け入れ、その信頼のゆえに、彼を義としてくださった、つまり彼を受け入れ救いに入れてくださったのです。

イエス・キリストによる救い

アブラハムも、イエス・キリストの贖いの業、十字架の死と復活を通して完成された、救いの御業によって救われました。キリストよりも、２０００年ほども早く生まれたアブラハムは、キリストを知らず、キリストを信じてはいなかったのに、キリストによってすくわれたのです。罪人の救いは、キリストによる以外にないのです。

ではアブラハムと同じ、律法のない状態で生きて来た日本人は、アブラハムと同じように、天地の創造者であるお方に信頼することによって、キリストの救いを頂くことはできないのでしょうか。聖書を調べる限り、できないと言う結論はどこからも出てきません。天地の造り主であるお方を信じる信仰は、ウエスレーの大衆伝道で見ることが出来たような、信仰告白と悔い改めによる明らかな救い、何月何日にどこでどのようにしてと言う、明白な救いの経験にはならないことでしょう。

義とされたアブラハムの経験もまた、いつどこでどのようにしてというものではありませんでした。一応、聖書の記述は、「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」となっていますが、そのアブラハムの信仰は、何もないところから突然湧き起こったものではなく、長い間の神とのお付き合いの中で培われ、育て上げられたものです。カナンの地に行きなさいと言われてそれに従った時から、アブラハムの信仰はすでに行動を伴って発揮されていたのです。アブラハムはずっと主を信じていたのです。その信仰が、自分に正妻による子が与えられるという、不可能なことを信じる信仰になって現れ、その信仰を神に対し、神はキリストの義を着せてくださったのです。

異邦人である日本人が義とされる信仰もまた、アブラハムのように神との長いお付き合いの中で、培われ、育てられるべきものです。その長いお付き合いの中のどこかで、キリストの義を着せられる瞬間があるのです。義としてくださるのは、まったく一方的に神の御業であり、神の権威に属することですから、人間の側から、いつどのようなときに義とされものか、特定することはできません。

イエス様を信じたユダヤ人の多くは、予備知識を持っていたために、信じる決意をした瞬間について語ることが出来たかもしれません。キリスト教文化の中で育った人たちも、そのような瞬間をのイエス様を信じるに至った異邦人たちにも、たしかに、このときと思う瞬間があったかもしれませんが、長い神様とのお付き合いの中で積み重ねられた信仰経験の、一つの頂点としてそのような経験を持ったはずです。

全能者に対する信仰

日本人はどこまで、全能者について知らなければならないのでしょう。全能者であると知る必要はあるのでしょうか。アブラハムは、私たちが言う「全能者」を理解していたでしょうか。天地の創造者と言う理解だけではだめでしょうか。自分を造り、生かしてくださっているお方では、いけないでしょうか。そのような理解とそれに対する信仰は、段々と固くなっていくものです。「いつどこで」は、神様にお任せすべきなのです。神が決定してくださることだからです。

私たちにできるのは、日本人の神意識を頼りに、あるいは橋渡しにして、聖書が教えている神について語り、その神を信頼するように勧めることです。文字で書かれた律法を持っていなくても、心に書かれた律法で生きている日本人の、信仰観、神意識を大切にして、そこに語り掛けて行くべきです。私たちが伝える福音は、イエス・キリストが、日本人のためにも十字架にかかって死んでくださったと語るよりも先に、天地を造り、人間を造り、命を与え、食べ物を与え、必要なものすべてを備え、生かしてくださっている、恵みの神をはっきりと示し、そのお方に信頼して生きることを勧めるものでなければなりません。

その神は西欧の植民地主義者たちが日本に持ち込もうとした、血なまぐさい神ではなく、アメリカに都合が良い日本を作ろうとしてマッカーサーが広めた、キリスト教の神でもなく、昔から、日本人が密かに心の奥深くで感じていた、大きく、優しく、気高く、恵み深いお方であること、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださるお方であることを、なんとかお教えすることでなければなりません。

天地を造り私たちを愛し、すべての必要を備えてくださるお方を信頼し、このお方がお望みになるような生き方を教えるべきです。そして、この方の素晴らしさを、人生の様々な局面で体験してもらい、さらに強く、このお方に信頼する生き方を勧めて行くべきです。このお方が人間に求め、期待しておられる生き方は明白です。

その第一は、神を愛することです。愛すると言うと、愛するという言葉を絶対の存在者に

向けて使うことには、いくばくかの躊躇を感じるので、むしろ敬う、敬愛するという表現にしましょう。すべてを造り支配しておられる気高いお方を敬い、ほめたたえて生きることです。太陽を見ても、月を見ても、星を見ても、海を見ても山を見ても、それらをお造りになった神を尊び、敬って、礼拝の心を持つことです。美味しい物を食べるとき、おいしいと感動するだけでなく、芳しい花にうっとりとするだけでなく、小鳥のさえずりに耳を傾けるだけでなく、それらをお造りくださった神をたたえるのです。そしてそれらの大きなもの、美しい者、美味しいものに感動する私たちの感覚と心を、お造り下さった神を褒め、ありがとうございますと語り掛けるのです。

第二は、神が特別に心を込めて、ご自分に似せてお造りになった、人間を愛することです。それは、自分以外の人たちも、神に愛されている存在であることを認め、何事においてもその人たちの幸せを願い、そのために努力することです。自分の益のためだけでなく、他の人たちの益も考えて生きることです。人間は神の愛の対象です。ですから、他人を愛することは神を愛することでもあるのです。

この、他人を愛することは、自分の力だけで努力してもうまく行きません。かならず、神の助けを求めながら努力することを教えましょう。すると、その努力の中に神の働きかけ、神の力を感じることが出来るようになるのです。すると神に頼ると言うことが、単に平安な心をもったり、優しい気持ちを持ったりするための、心理作用を期待することではなく、実際に神の力を体験し、神の助けと愛を体験することであることがわかるのです。

そのようにして、まず大きく恵み深い神を体験し、その愛と力を実感してもらうならば、キリストの話も、躓くことなく聞いてもらえるようになります。十字架の贖いの教えも、感動と喜びをもって受け入れてもらえます。神の御心に沿わない生活をしていた罪人であることも素直に認めてもらえます。だから、本物の悔い改めも期待できるのです。このとき、キリストによる救いが、理解されるのです。

付録

※※　依代（よりしろ）の意味について。　日本語の「依代」という言葉は、あまり用いられない時代になっていますが、日本人の宗教感覚、特に神道的な宗教感覚を語るには、欠かせない言葉です。ちなみに、**辞精選版 日本国語大典** では、「 神霊が出現するときの媒

体となるもの。神霊の寄りつくもの。正月の年神の依代としての門松などのような特定の枝葉や花・樹木・岩石、あるいは形代(かたしろ)・よりましなど、きわめて種類が多い」と、説明されています。しかし私のエッセイの中では、本来の日本語の意味を変えて、「無限の霊的存在である神が、人間にご自分の臨在を強く示すためにお用いになる、象徴的な事物」という意味で用いています。誤解されやすいのですが、日本語には私が表現したい意味の言葉がないための苦肉の策で、依代が最も近い意味を持つと思われるための借用です。とても不思議なことですが、聖書には、このような方法で神がご自分の臨在をお示しになっている事例が豊富なのに、英語には、神学的表現としても、一般的会話の表現としても、そのような意味合いの言葉がありません。伝統的なキリスト教には、聖書が大切にしているそのような概念が、まったく欠けている明らかな証拠となります。日本語の依代では、いわゆる憑依という現象、普通は「憑りつく」とか「のりうつる」とか言われる現象として語られ、聖書にもそのような事例が、多数記されています。しかし私がエッセイの中で、「依代」を用いる場合には、憑依の意味を完全に排除し、臨在の強調を語っていることをご理解ください。